

## 中国医科大学での留学について

2019年5月19日から2週間、中国の瀋陽という都市にある中国医科大学で臨床実習を行いました。そこでの活動について報告させていただきます。

### ・留学をしようと思った理由

5回生の時、愛媛大学付属病院での臨床実習を行っている間にリトアニアからの留学生を受け入れたことがあった。その際にお互いの国の医療体制や医学教育の違いなどを話し、自ら海外の医療現場を見てみたいと思うようになった。その後海外協定校臨床実習派遣プログラムについて知り、応募を決めた。

### ・中国医科大学を選んだ理由

本プログラムの候補地は中国2大学、韓国、台湾の計4大学であり、その中から中国医科大学を選んだ理由は主に3つある。1つ目として、現在経済成長を遂げている最中の中国では、臨床実習を行う上で最新の技術と発展途上な分野の両方を学ぶことができるのではないかと考えた。2つ目は、漢方を用いた東洋医学にも興味があるため、本場中国では西洋医学とどのように組み合わせて診療を行っているのか見てみたいという気持ちがあった。日本では漢方について学ぶ機会がそう多くないので、これを機に学べたらと思った。3つ目に、中国医科大学は旧満州医科大学であり、瀋陽がそもそもかつての満州国・奉天であったということがある。中国医科大学では日本語で授業を行うコースもあるとのことで、愛媛大学からは初の留学であったが安心していくことができた。また、日本と縁深い街で歴史について学びたいと思い、また現地の人々は現在日本についてどのような印象を持っているのかこの目で確かめたいと思った。



### ・留学先で学んだこと

小児科と婦人科で1週間ずつ実習を行った。小児科では日本への留学経験のある先生につかせていただき、病棟業務を主に見学することができた。日本とは異なり、大部屋でも両親が住み込みで看病しており病室の人口密度が高いことや、廊下にもベッドが並んでいる

ことに驚いた。また、瀋陽はモンゴルに近いのでイノシシ肉を食べることや家畜との接触も多く、E型肝炎やブルセラ症など日本ではあまり見かけない疾患について学ぶことができた。

婦人科では、多くの手術を見学することができた。手術室の数もかなり多く、先生方は1日に5、6件の手術をしているとおっしゃっていた。内容としては開腹から腹腔鏡下、子宮鏡下での手術まで幅広く、疾患も頻度の高いものの中に非典型例や希少疾患が混ざっていた。なかでも印象深いのは、子宮筋腫が子宮静脈に沿って浸潤した症例である。執刀した先生もレアな症例だとおっしゃっており、子宮と両側付属器に加えて子宮静脈切除術を初めて見る事ができた。

漢方に関しては、中医大学という漢方専門の大学病院が別にあるため、中国医科大学では日本と同様に西洋医学の補助として漢方を用いていることが分かった。処方には、日本でも用いているものもあれば聞いたことのないものもあり、選択肢の多さを感じた。



#### ・留学先で感じたこと

今回の留学で、日本にいるときに感じていた中国のイメージは大きく変わった。留学前には日本人に対して良い印象を持っていないのではないかと不安に思っていたが、実際は日本のテレビ番組や音楽、食品などがかなり浸透していた。日本人とわかると日本語で挨拶をしてくれるなど、友好的な空気を感じるが多かった。また、街もかなり発展しており高層ビルが立ち並んでいた。大学の図書館も改装を経てスマート化が進んでおり、スマートフォンの普及率やIT技術の高さに驚いた。しかし少し裏道に入ると生活感のある路地が広がっており、経済成長のスピードとそれに伴う生活格差を感じた。

2週間の中で、以前愛媛大学に留学していた学生たちがボランティアで様々な手助けをしてくれた。初日に空港で出迎えてくれてから、中国各地の料理を食べに連れて行ってくれる日もあれば、週末には瀋陽故宮の案内をしてくれた。その時に、お礼を言うたびに彼女らは「私たちが日本に行った時もみんなに良くしてもらったから、同じようにしているだけ」と言ってくれた。特に食事の際に、食べきれないほどの料理を用意するというおもてな

しの習慣を感じられた。学生たちや先生方との食事はとても楽しく、実習をする励みにすることができた。



#### ・まとめ

今回の留学を通して出会った人、見て感じたものは、忘れられない大切な思い出になった。勉強熱心な中国の学生たちに負けないよう、私も今回の経験を糧にして立派な医療人になれるよう努力したいと思う。